

消し去られた文字

——「満洲国」における検閲の実相

岡田 英樹

はじめに

これまでわたしは、「満洲国」で筆をとった中国人作家たちが、検閲の網をくぐり抜けるために、どのような表現技巧をつかってみずからの真意を読者に伝えようとしたのか。また新聞や雑誌に発表した作品を単行本にまとめる際には、検閲の目が厳しくなることに配慮して、やむなく原文の一部を削除し、あるいは表現を曖昧にするといった措置をとらざるをえなかった実態をあきらかにしてきた。⁽¹⁾

異民族統治という特殊な環境のもとで、自分が語りたくても語れない言葉は何なのか、他人（当局者）が語らせようとするが、自分は語りたくない言葉とは何なのか、自分が語りたい、そして語れる言葉は何で、それをどのような方法で語るのか、こうしたことを淪陷区の作家たちは具体的に考えなければならなかったのである。⁽²⁾

といわれるような状況を、作品分析を通して浮き彫りにしてきたのである。その作業の過程で、中国人作家が言論統制に恐怖を抱き、警戒せざるをえなかった背景についても一定言及してきている。たとえば、「満洲国首都警察」が警務総局長の指令を受けておこなった文芸界にたいする内偵調査報告書の紹介や、その場合、作品検閲が具体的にどのような形をとって実施されたのか、といった点についてはすでに論として発表している。また「新聞雑誌に発行される文芸物中特に注意を喚起すべきであると思はれた諸点を列記したわけで、制限と禁止の範囲を示すと共に、その方針を一応知つて貰ふ」ために出された検閲基準についても、総務庁参事官別府誠之の談話記録という形で紹介しておいた。⁽³⁾ インタビュー記事であるため、その語句がどこまで正確かは問題だが、その内容は以下のとおりであった。

- ①時局に対し逆行的傾向を有するもの
- ②国策の批判に当たつて誠実を欠き建設的ならざる

もの

- ③民族意識の対立を刺激するもの
- ④建国前後における暗黒面の描写のみを目的とするもの
- ⑤頹廢的思想を主題とするもの
- ⑥恋愛情事に関しては刹那的、三角関係、貞操軽視等の恋愛遊戯、愛欲描写、変態性欲、或ひは情死、乱倫、姦通等を描写せるもの
- ⑦犯罪の描写に当たつて残虐或ひは深刻なるもの
- ⑧酌婦、女給等を主題として歓楽街方面特有の世相人情のみ誇張描写せるもの

中国人の作家や編集者からは「八不主義」（八つのべカラズ主義）として恐れられていたものだが、当然こうした言語表現の「制限と禁止」は、中国人にのみ適用される枷ではない。「在満」日本人作家青木實は、筆者の質問にたいしてこのような回答を寄せている。

小生の『新天地』発表短篇「殺意」、『作文』発表短篇「奇怪なる一日」、いずれも関東州内検閲は無傷ですんだが、新京で単行本掲載のため（審査をうけたところ）弘報処検閲で掲載不許可、没収。お陰で『新天地』文芸時評で、宮井一郎が一月分の大半を費やしてくれた。小生（の）労作？行方不明、いずれも民族問題をあつかっている。

『作文』同人日下ひろし（熙）氏作品は、関東州内検閲で、風俗で全篇削除、一部削除の常習犯であった。

そこで本稿では日本語作品に限定して、検閲の実態を考察してみたい。ただし、いまだ資料提示の段階にとどまっていることをおことわりしておかなければならない。文芸活動全体の監視制度、作品の検閲がどのような体制で、どのような形でおこなわれていたのかを含め、思想統制・検閲の実態については、より深めた考察が待たれている。

1. 翻訳作品の検閲

可欽 (爵青)・大内隆雄訳「妓街と船上」(『満洲行政』6—4 1939.4.1) が目次のタイトルに黒線を引かれたうえ、最後のページを残して全文削除の被害にあった。該当ページをすべて引きちぎるといった荒業である。原文は、「妓街与船上」(『新青年』第61号 1937.9.10) で、時間の推移とともに検閲が強化されたとも考えられるが、中国語原文では見逃されていたものが、翻訳されたことにより当局の目に触れてしまったというのが真相であろう。

〈あらすじ〉船員として働く「わたし」(24歳)は、港につくと、厳しい労働からの解放感と、あり余るエネルギーを発散させるため、酒を飲み、女を買う。親しくなったばかりの同僚・白林と街へ出かけるが、白林は酒にはつきあうが女を買いに行くことは拒否し、「わたし」は若い妓女を相手に欲情を吐きだす。翌朝、自らの行為を恥じる「わたし」にその女は、白林の妹であることを告げるのであった。

全文削除の理由は、おそらく禁止条項の⑧、あるいは⑥に該当するかと推察されるが、文中確かに少し過激と思われる表現が見られることも事実である。

①(「わたし」の愛撫にたいして彼女は何も反応を示さない。その冷やかな態度に怒った「わたし」に) むかって、)

「でも、あなた、お給料はもってきているの？」別の人と話をしているように、彼女は冷静であった。

わたしは少し腹が立ったが、ある一つの行動だけが彼女の笑みを引き出せることを知っていたので、ポケットから金の匂いがする財布をベッドの上に引きだした。すると一枚の紙幣がこぼれおち、彼女は静かに、ベッドに落ちた紙幣をながめていた。

今度は彼女は、みずから身体をわたしに押しつけ、脂ののった彼女の身体から魅惑的な香りが感じとられた。彼女は考えられる限りのやり方でわたしの身体のあちこちを撫で、わきの下を手でさすり、さらに繊細な指を使ってわたしの胸毛を撫でてくれた。

灯りを吹き消したとき、わたしは水上の囚人籠を忘れ、船長のことを忘れ、明朝の空っぽの財布のことを忘れた。(P. 65)

この作品のテーマは、昨晚の「獣行」を反省した「わたし」が、金のために肉体を売らねばならない彼女たちを「生ける屍」なのだと考え、自分を振りかえって、「わたしは死人でないにしても、おとなしく飼いならされた家畜であり、二百キロにもおよぶ重い荷物、石炭ガスの匂い、灼熱の太陽、船長の目……わたしだっで決して人間なんかじゃない！」(P. 65) と叫ばせているように、「妓街」も「船上」も、人間が人間として生きる世界ではないことを訴えようとしている。その意味からいえば、上記引用部分も、所詮は金のための肉体交渉に過ぎないことを示唆し、翌朝の「反省」を引き出す伏線として使われていることが推察されよう。妓女と船員の生活をとおして、閉塞状態におかれた「満洲国」の現状を写しとろうとした爵青の試みは、「歓楽街方面」を素材としたことと、その「愛欲描写」ゆえに発表は許されなかった。

2. 「愛欲描写」にたいする検閲

上記爵青の作品もこの部類に入れられるだろうが、「恋愛遊戯、愛欲描写、変態性欲」、「情死、乱倫、姦通」といったテーマにたいしては、かなり厳しい姿勢でのぞんでいたように思われる。青木のいう「風俗もの」もこのことを指しているのだろう。

冬木羊二(本名白石義夫)の短篇小説集『青き夜の医師』(モダン満洲社 1938.8.25)は、その最大の被害者といえるかもしれない。冬木は「満洲国」では数少ない大衆文学作家で、大衆受けする読み物を得意とした。しかしその作品が、倒錯的・嗜虐的な性の世界に踏みこむと容赦なき検閲・削除が待っていた。この作品集では、「貴婦人」、「柘榴と相公」、「小河沿の妖花」などがそれにあたる。ここでは「柘榴と相公」を例にとって、考察してみよう。相公とは男娼のことをいう。

〈あらすじ〉男娼として娼家に売られてきた少年。体つきまで女に変えられて、客に身を売る毎日がつづく。しかし、優しく接してくれた玉芝姐さんが、役に立たない身体となったため親方に毒殺されるのを目にして、復讐を決意する。色仕掛けでたぶらかし、親方の目をえぐって思いを果たし、みずからも命を落とす。

『奉天新聞』(1930.7)が初出ということだが、その文献は見られない。したがって、削除された文章の前後から、その内容を推察するしかない。

①(食をあたえず、無理に胃を小さくして太らない身体に仕上げられたうえ、ある日、親方から「妙

な薬」を飲まされる。) その晩から私はひどい高熱に悩まされ、ひつきりなしに水を求めた。その時は傍に玉芝がよく来てくれて、〔28字削除〕

『可愛想に、可愛想に』と涙ぐんだ眼で見守り、そつと私の唇に冷い氷のかけらを含ませてくれた。(P.143)

- ② (男娼として、実際何をしなければならぬかを教えるため、二階の一室から下の部屋をのぞかされる) 真暗中に見るまに一尺四方の視野が明るくなって、ありありと下の様子が見えて来る。私は眼をこらさずには居られなかつた。下は何処の部屋にあたるのか、〔41字削除〕私は思はず声をたてようとした。姐さんが折り重なる様にして、私の肩を押へてたしなめた。私の心臓はトクトクと音をたて、鼓動した。〔33字削除〕私はぐつと綾吊を口にくわへて声をころしたが、身を起すと堪り兼ねて玉芝の膝に顔をうずめて泣き出した。(P.149)

- ③ いつまでも姐さんに甘えて居た。無邪気だつた私——今それがはつきり分つた。〔24字削除〕こゝは相公茶屋なのだ。私達は相公^{ジャンクン}として仕立てあげられた売物なのだ。(P.150)

- ④ (親方を色仕掛けで誘惑しようとして) いきなりその節くれだつた手を取つて、ぎゅと握つた。／「おとうさん——」と取つて置き、殺し文句を投げた。狒々奴！彼はその脂切つた顔を近づけた。〔7字削除〕私は素気なく壁の方を向いた。又大声で笑つてごまかす親方だつた。(P.165)

- ⑤ 不意に私は、荒々しく、この大男のたくましい腕の中に、がつきと折れんばかりに抱きこまれた。目的を果す為には彼奴を充分油断させてと思ひ、私はなすがまゝにされた。／〔14字削除〕私はもうこれ以上語れない。／だが、私はそこに、玉芝の血を吐く蒼ざめた顔を見た。今だ。今だツ／私は力を得た。勇気を得た。(P.167)

初出は「満洲国」成立以前であり、こうした猟奇的な世界でも新聞連載が可能であったのかもしれないが、1938年までくると全文掲載は認められなかった。

青木實の短篇小説集『北方の歌』(国民画報社 1942. 12.10) にも、いくつかの削除が見られる。青木はその「あとがき」で、「しかもこの度上梓に当たつては、多くの部分に涉つて削除を余儀なくされた。大東亜戦争以前に書いたものだから、と云ふことは作家の心構

えから云つて申し訳にはならないし、(中略) 今後これらの部分について深く反省し研鑽に努めたいと期してゐる」(P.363) と殊勝な言葉を残しているが、もちろんすべての削除に納得しているわけではない。ここでは、「砂塵」という作品について触れておく。これは「張といふ男」と題して『満蒙』(17—4、1936. 4.1) に掲載されたあと、「砂塵」と改題されて『作文』(第21輯、1936.10.20) に再録されたものである。

＜あらすじ＞妻・呂氏、娘・秀華と三人暮らしの張鳳山は、レンガ工場で働いていたが、レンガの山が崩れ大怪我をする。ある寡婦と怪しい仲であったトラック運転手の権伯山は、かねてから呂氏に目をつけていたので、寡婦と手を切り張の家に下宿人として住み込む。たちまち二人は肉体関係を結び、張鳳山は食客のごとき身分に落ちてしまう。健康が回復し、レンガ工場へ再就職を頼みに行くが相手にもされない。権の口利きでやっと××商會に雇われることになり、「権には相当の礼金を出して、この家から出ていつてもら」い、再びもとの家庭生活を取り戻そうと考えていた張の思惑もはずれる。健康診断の結果、肋骨にひびが入り、結核菌にも冒されていることが判明し、本採用とはならなかったからである。

上記『作文』所収のものをテキストに、削除部分をおこしてみると次のようになる。〔 〕部分が削除された文章である。

- ① あんまり早くから床についたので、夜中に目が覚めた……〔ひよいと見ると、隣りに寝てゐる筈の女房の姿が見へなかつたが、便所にでもいつたのであらうと気にもとめなかつた。二度目に目がさめたとき、やつぱり姿が見へなかつた。便所にしては……と思つて、直ぐにグイと胸を突き上げるものが浮んだが、どういふ訳か彼はそれを確めやうとはしなかつた。張は蒲団を頭から引きかぶつた。目が冴へて眠れなかつた。〕

翌る日、朝の食事に皆んな一緒に就いた。権も呂氏も元気で冗談など言つてゐた。張はどういふ訳か二人の顔を正視することが出来なかつた。これではまるで反対だ。張はさう思つたが、やはり日光を恐れた。(P.155)

- ② 〔それから毎夜のやうに、呂氏の姿は、張の傍から抜け出ていつた。(中略) 一方、今まで飽和を感じてゐた、執ねくからみついてくる呂氏の肉体に対して、権のことがあつてからは、これまでに味つたこともない魅力さへ感じられてきた。張は、

権とのことを想ひ乍ら、ねぶるやうに呂氏の身体を眼で撫でました。張は、ある夜呂氏が床に就くのを待つて、手を延ばした。呂氏はむしろ素直に応じた。真夜中、ふと張が目覚めたとき、彼の床の中にも、その隣りにも、呂氏の姿はみへなかつた。だが張は、それ以上首をもたげて、呂氏の姿を逐はうとはしなかつた。] (P. 155)

- ③ [丘の高みに、上つた。気のせいか張は、息ぎれがした。せつない気持が胸に一ぱいに振り、] 張は秀華を抱き上げた。五つの娘は、彼になぢまなない、冷めたい他人のやうな眼つきをしてゐた。[なんといふことなく、権の影みたいなものが眼の前をかすめたやうな気がした。] 日は後のもつと高い山の背後に落ちてしまつて、空は炎のやうな夕焼け空だ。張の鼻先きに水ツ涙が光つてゐた。(P. 159)

仕事上の事故で職を失い、再就職もままならぬまま、家庭に入り込んできた権伯山に女房を寝取られ、家庭の実権さえ奪われ、五歳になる実の娘にまで冷たい視線をむけられながら、何も手出しができない気の弱い張鳳山——青木がしばしばテーマにとりあげた「満人もの」(「在満」中国人を素材にあつた作品)の代表作の一つである。「大体異民族の生活に取材するといふことはむづかしい。ししか異民族相互間の理解を深めるといふ見地からも、満洲で小説を書くものに与へられた一つの義務であると自分は信じてゐるものである」(前掲「あとがき」P. 364)と述べているように、中国人——それも虐げられ、生活苦にあえぐ中国人の姿を写しとすることは、青木には「義務」と考えられていた。その作者の思惑も、「愛欲描写」あるいは「乱倫」ということで、カットされる運命にあつた。

吉井一男が「長男出生」(『満洲行政』7—12、1940. 12. 1)という作品を残している。ここにもごく些細な表現カットが見られる。

＜あらすじ＞再婚して初めて授かつた子どもの育児に、とまどい、時には口争いしながらも協力して、子どもの成長を見守り、喜びあふ真吾夫婦の姿を描く。

ごく平凡な日常生活を描いたものだが、真吾の最初の結婚で、七ヶ月の早産で生まれた子ども(二時間ばかりで息を引き取る)の痛々しい姿を描写した部分が伏せ字となっている。

- ①だが何よりも真吾が痛ましく思つたのは、そんな

身体にもはつきりと性別の具つてゐることであつた。呼吸さへできかねる肉体に〔以下10字削除〕この子にもやはり人間として生き、生活する意志があつたのだといふことを真吾は知つた。(P. 120)

おそらく男の子の「性器」をあらわす表現であつたと推察されるが、なぜここまで削除されなければならなかつたのか、事情はよくわからないが、一つの事例として記録にとどめておく。

3. 時局・国策批判にたいする検閲

菅忠行が、『北窓』に掲載した「河のない河」(『北窓』2—3 1940. 5. 25)、「興安嶺麓地帯——朔北紀行」(『北窓』3—1 1941. 1. 30)は、いずれも「北満」の農村や都市を調査・視察旅行で訪れた時のルポルタージュである。物価の高騰や、農村の疲弊、民族政策のソ連との比較、官吏への批判などがことごとく削除された。

「河のない河」

- ① (ある糧棧の経理が語る農村の物価状況) 「それに今年は麻袋が不足でしてね、麻袋は御存知でせうが印度から来てゐるのです、それが歐洲の戦争で駄目になつて、今年は全満で八百五十万袋例年の三分の一しか配給されんのださうですよ、〔以下57字削除〕、公定価格は大豆は旧一石二十八円なのに包米や高粱は三十円以上してゐるでせう、これぢや来年は大豆の耕作面積はぐんと減りますよ、今迄はいゝ値だつたんですが、今年専管公社が出来てから駄目ですね、〔以下31字削除〕。」と、話は次から次へと尽きないのだが、彼等は彼等の世界に於ける範囲内でのみの国際情勢に通暁してゐる。(P. 156)
- ② (今夜泊まることになった農家の屋内描写につづけて) そこへ毛皮の外套を着た男が入つて来て、挨拶をして出て行つた。此の辺には余り見かけない服装の男なので、〔以下279字削除〕(P. 173)
- ③ (最後の調査地点・西湖景と劉屯を訪れて) 劉屯は以前八〇戸あつたのが今は五〇戸しかなく、其の内三分の二は貧民であつて、今迄の部落のどれよりも民に生色無しと言つた感じだ。余りの懸隔に一人の老人に聞いたたら、「まあ聞いて下さい、〔以下90字削除〕。」と訴へる。「馬を売つたら耕作出来んぢやないか。」「没法子です。殺されるよりかゝです。生きて居りや何時か又馬は買へます。

土地を売つて勞瘠代になつても仕方ないです。」と没法子の一天張りで、諦めの人生観だ。(P.176)

- ④ (西湖景の名前の由来——蒙古語で「河身の無い河」という意味——の説明をうけたあと) 成る程、河身の無い河が、而も水は表に顕れずに流れてゐると言ふ。〔以下286字削除〕／一面の羊草に覆はれた湿地地帯に虚ろな目を向け乍ら、数々の部落で見聞した事実を思ひ浮べ、中央政府の行政機構の改変に、経済統制に、鉱業部門開発に、向けられた方針の内どの部門が是等農民に対する助長、保護政策になり得るであらうか、中央政府の近代的な構成美を誇る庁舎に住む役人の誰が、このミゼラブルな農民生活の実態を、単に研究の対象としてのみならず、社会政策実践の対象として現実に於て把握しようとしてゐるであらうかと考へ込むのであつた。(P.177、178)

〔興安嶺麓地帯〕

- ① (最近におけるソ連「赤色政権」のカザツク人に対する民族政策を述べて) 民族統治は、形式は民族的に、内容は〔以下5字削除〕に行ひ、相手をして心服せしめる、——言語の理解もさることながら、風俗・習慣・伝統を研究し、抑へるべき点を間違ひなく抑へて統治すべきで、その点日本人の直情径行は大いに考慮を要するものである。(P.145)
- ② (訪れた国境の街、満洲里を紹介した部分) 現在は本当の国境の通過駅になつてゐて、最近欧洲大戦を避けて上海、香港方面にゆく猶太人と、〔以下25字削除〕、欧洲情勢に照応して再び浮び上つてきてゐると言ふ。(P.159)
- ③ (今回の旅行での感想をのべて) 海拉爾でも満洲里でも、行く所、行く機関の先々で、大半の方が、「私は赴任したばかりで、まだ事情によく通じてをりませんが……」と前提されるのを聞き、その人たちの新しい手腕に期待する〔以下23字削除〕のだつた。(P.160)
- ④ (旅程の途中で「軍用列車」優先のために足止めをくって) 白城子からはガソリン・カーがでることになつてゐたのだが、けふはあいにくの大雪でスリツプが多いのに加へて、われわれ一行のほか〔以下4字削除〕軍隊もあつて、〔以下8字削除〕列車が出ることになつたが、そのため四十分ほど時間を食ひ、その間を寒風の吹きさらすプラツト・ホームで重いルツクを担いだまま待つてゐ

た。(P.161)

初出雑誌での削除であるため、長文の伏せ字部分をおこすことはできない。しかし、前後の関係から、現実社会の矛盾や時局にたいする批判が削除されていることは理解されるだろう。

前掲青木實短編小説集『北方の歌』にも、政治的な意味合いから部分削除された作品がある。「呼倫貝爾」である。『早稲田文学』(1940年 未見)が初出だが、戦後出版された『旅順・私の南京』(作文社 1982.12.1)には、この作品が『早稲田文学』掲載作品を底本として再録された。作者はその再版「あとがき」で、『呼倫貝爾』二六六頁、二七四頁の欠字の部分は、当時の検閲の結果によるもので、今となつては充当する言葉も忘れてしまった。(前掲『旅順・私の南京』「あとがき」P.276)と述べている。

<あらすじ>学生の安藤次郎は、夏休みの二カ月をホロンバイルにある恵東公司で、実習生活を送ることになる。この公司是、農場経営とともに、伐採の事業をおこなっている。芍薬の大群生や恐ろしい虻の襲来など、北満のめづらしい風物とともに、コザツクの人夫をこき使つて営まれる荒々しい山の生活も描かれる。民族的優位性の上にあぐらをかき蒙古人やロシア人を見下す日本人に、次郎の心は痛む。

- ① (伐採した丸木を、河に流して流送する仕事に次郎は派遣される) 同行する二人の監督といふのは、一人は満洲事変に出征して匪賊の二、三人は射ち殺したことのあるといふ兵隊上がりで、(P.17) → 『旅順・私の南京』では〔射ち殺した〕を伏せ字とする。
- ② (蒙古人のオボ祭りに招かれた次郎は、日本人の「お役所の有力者」が酔ったあげく、次郎が親しくなつた白系露人グルゴリーの新妻とその妹を娼婦のように扱うことに耐えかねて、二人を救いだしてやったことにたいし、その取り巻き連中の一人が、次郎に近づきすごんでくる) 「まあ知らんのなら、一応注意しておくけどね我々が〔以下16字削除〕！ソレニ先ツ刻のあのザマはなんだ！客扱ひも知らない」(P.28) → 『旅順・私の南京』から、伏せ字部分最後の7字が〔出来んのですよ〕であることがわかる。

作品のテーマそのものが、安藤次郎のひと夏の体験をとおして、日本人の異民族にたいする優越感、傲慢

さを暴露することになり、削除部分もそのテーマにかかわっている。

丸山海介『辻説法』(芸文社出版 1943.7)は、『モダン満洲』に連載した「風俗月評」と、『芸文』に連載した「辻説法」を集めたものだが、どちらも辛辣な世相批判である。後者について「著者しるす」にはこう書かれている。「これは、雑誌『芸文』の創刊号から十七号まで一昨年一月から本年六月一に、毎号「辻説法」と題して、見開き二頁づつ載せてきたものを集めたものである。／このうち二回ほど検閲でやられた。一回は割に軽く始末書で済ましていただいたが、一回はどうしても駄目で、遂に前半一頁の削除処分を受けた」(P.233)

これは『芸文』(2-8 1943.8.1)に載った「万骨枯る」(P.145、146)とおなじく1巻7号(1943.6.1)に掲載された「政府と特殊会社」をさすと思われる。前者は全文削除、後者は前半部削除の憂き目にあった。しかし丸山はあえて、「万骨枯る」(全文削除)、「政府と特殊会社」(前半削除)と書き入れて、単行本を刊行した。検閲への反抗であり、気骨を示した行動といえよう。

神戸悌の『県城』(国民画報社 1944.8.25)では、「戦はざる兵たち」が目次タイトルを黒線で抹消されたうえ、全文が削除された。初出不明のため、その内容にまで言及できないが、全体の28%が削られたことになり、定価も3円50銭から3円に改定されている。

4. 日向信夫の遺著『凍原の記』

「満州国」の日本人作家のなかで、日本文壇にもっともあこがれ、プロになることを目指していた作家は日向信夫かもしれない。その思いは、かれの最後の小説集となった『凍原の記』(国民画報社 1944.9.5)の「あとがき」によくあらわれている。

東京に帰って文学に専念すること、これがここ数年来の私の念願であつた。そして昭和十八年一月十八日、私は希望に燃えて日本に帰ってきた。

本書はかかる私の文学に一応区切りをつけ、併せて長い満洲生活の記念ともするべく出版を意図したものであつたが、まだ組版も終らぬ今、急に召集令状に接し、明日からは一兵士として銃を執る身となつた。(中略)思へば本書は、私の最後を記念するものとなるかも知れない。しかし若し生きて再び東京に還る日があれば、私の文学も大

きく変つて行くであらうと思ふ。「応召前夜 東京牛込にて」(P.305、306)

すでに30歳に達していたはずの日向にとって、この年齢での召集はおそらく予想外のことで「私は自分に残された青春最後の幾年間かを硝煙の中を送る身となつたが、この疾風怒濤の時代に生れ合はした青年として、最も美しく且光榮ある生き方であると信じてゐる」と、「あとがき」に記してはいるが、自分を納得させるのは容易ではなかったろう。そして日向が「生きて再び東京に還る日」はめぐってこなかった。沖縄に送られ戦死したといわれている。したがって、この『凍原の記』はかれの遺著となったわけだが、この作品集に大きなメスが入られた。二つの作品が全文削除、一つの作品も部分削除となったのである。

「春遠胡同」がなぜ全文を削除されねばならなかったのか、その理由がよくわからない。というのもこの作品は、『満洲作家九人集 廟会』(東京・竹村書房 1940.5.20)にも、またかれの最初の短篇小説集『第八号転轍器』(東京・砂小屋書房 1941.5.5)にも採録されているからである。

<あらすじ>列車車掌・王書紀と機関士・楊維烈の関係は深刻なものとなっていた。急死した維烈の兄・維新の死亡給与金三百円をめぐって、維新の妻・張氏と維烈がはげしく権利を主張しあい、王の証言で張氏に権利が認められることになったからであった。さらに王書紀の「疚しさ」は張氏に何かと面倒をみるなかで「変な関係」になってしまったことであつた。楊維烈は兄の遺骸を故郷に搬送することを口実に金銭を強請りとうろと考へ、王は張氏から金を出させてその上前をくすね取ろうと企む。しかし、張氏は若い男と一緒に身を隠してしまうのであつた。

三人とも、それぞれしたたかな小悪人だが、その狡猾な人物像はよく描かれている。しかも、未亡人である張氏が駆け落ちをして、二人の男の鼻をあかすという結末も心憎い処理の仕方であつた。作者もこの作品には自信をもっていたのであろう、三度も作品集に収めていることがそのことを示している。「全文削除」の理由を強いてあげれば、王書紀とその妻、そして張氏の「三角関係」ということになる。たとえば、

①(王書紀の張氏にたいする感情を述べた部分)第一自分の気持からして純粋なものではなく、当分食ふに困らない現金を持つた若い女に対して、金で自由になる女と同様な、無責任な交渉を続けて

るだけに、相手の気持などさう深く考へて見たこともないのである。(前掲『第八号轉轍器』P.252)

といった表現である。しかし、わたしには別の意図が働いていた削除としか考えられない。

「奉天の宿」という作品も、全文削除の対象とされたが、残念ながら初出不明のため、削除の内容にまで踏みこめない。

「一時期」という作品にも一カ所、墨塗りによる削除がある。「満洲」で駅の荷物係として働く朝鮮人金尚権の目をとおして、「在満」朝鮮人の腐敗、よき日本人になろうとしても日本人による差別からは逃れられない現実、あるいは朝鮮人と中国人の軋轢など、短篇ながら「満洲国」における民族問題を正面にすえた作品である。『作文』(第8輯 1939.7・未見)と前掲『第八号轉轍器』に掲載された。〔 〕内が削除された部分である。

- ① (朝鮮人が中国人(満人)と口論になったとき)
「その時その満人が俺に向つて何と云つたと思ふ?—お前達は日本人だと云ふが、[鮮人は日本人ぢやない、亡国の民ぢやないかと云つたよ—]」 / 「—悲しい言葉だな」(P.188)

さきの「春遠胡同」を削除するならこちらのほうを、といたくなるほど真剣に民族問題を採りあげ、「民族意識の対立を刺激する」作品となっている。

組版も手にしないまま出征した日向が、検閲から出版にいたる顛末を承知していたのかどうかはわからない。ただこの『凍原の記』は、3分の1近くをカット

され、3円20銭の定価を2円80銭にあらため、表紙に「削除済」の印鑑を押されて、出版されたのであった。

むすび

最初にことわったとおり、いくつかの作品を読むなかで見つけた伏せ字や全文削除を、すこし整理してみただけのことである。もっと系統的、かつ全面的にこうした作業はなされるべきだと考えている。というのも、こうした検閲・削除の実態は有形無形の圧力となって作者の意識に影響をあたえ、筆の運びを萎縮させるからである。とくに中国人作家についてはっきりとこのことはいえる。とすれば「満洲国」にあっては表現の何が許され、何が許されなかったのかについて、実態に即してあきらかにされる必要があるだろう。その実態を踏まえることで、作者が筆にしたいくとも表現できなかった創作環境が見えてくるはずである。拙論は、そこにいたる一段階と考えている。

《注》

- 1 拙論『『満洲国』の創作環境と技巧』『近代日本と「偽満洲国」』日本社会文学学会編、不二出版、1997.6.30
- 2 銭理群「中国淪陥区文学大系・総序」『中国淪陥区文学大系』広西教育出版社、1998.12
- 3 拙論『『満洲国』首都警察の文芸界偵諜活動報告』『立命館言語文化研究』6—2、1994.9.20
- 4 拙論「満洲国首都警察の検閲工作」『立命館文学』第567号、2001.2.15
- 5 拙論『『八不主義』の恐怖』『中国文芸研究会会報』第213号、1999.7.31

(筆者 立命館大学国際平和ミュージアム企画局長)